
色情の息子

越本いつき

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色情の息子

【Nコード】

N5548D

【作者名】

越本いつき

【あらすじ】

ポルノ映画館の館長を父に持つ主人公。父の遺品を整理する中で見付けたもの、それは？

s c e n e 1 (前書き)

この小説には、内容に性的なものが含まれています。ご注意ください。
い。

scene 1

「有^{ゆう}ちゃあゝん、このアナルバイブ、最高よ！ アナタも使^{つか}ってみるっ？」

「おい、オナホール徳用三十個パック、まだ未開封だぜ。高校生の有^{ゆう}には、やっぱりこれだろ」

「山下^{やました}さん、街山^{まちやま}さん、無駄口^{むだぐち}たたいてないで、さつさと片付けてください」

夕暮れ間近な、黄昏時。世間では家路につく子供や、夕食の支度をする母親たちの、あたたかな光景が繰り広げられているのに、僕は二人のゲイと一緒に、狭くて臭い部屋の中を片付けていた。

「まあ、有^{ゆう}ちゃん！ あなた、思い出に浸る感傷とか、持ち合わせてないの？」

「アナルバイブに思い出なんて、ありませんよ」

「有^{ゆう}、それは言いすぎだろ。仮にも館長が、大切に使い込んだものなんだからよ」

「アナルバイブを百五十本使いこなす父親が、世間一般のどこにいるっていうんですか」

「有^{ゆう}ちゃあゝん！？ あんなに立派な館長のことを、なんてまあ！」

僕は無視して、作業に戻った。目の前にある、等身大リアルオナ

ドール・彩ちゃんの身体を折り曲げ、強引にダンボールに詰め込み、ガムテで厳重に封印した。このままでは、どこのゴミ業者にも出せない。

「しかし、このコレクション、俺らからすれば垂涎ものだけ。有、これ本当に全部捨てちゃうのか？」

「欲しければ、勝手に持って行ってください。でも今日中に、全部片付けてくださいよ」

「有ちゃん、街山ちゃんが言いたいのね、そういうことじゃなくて……」

山下さんが、丸っこい身体を、僕のすぐ隣まで寄せて、耳元でささやいた。

「これ、館長……いえ、あなたのお父様の遺品なのよ？　ほんとに、何も持っていないの？」

父は、ミニシアター『色情会館^{しきじょうかいかん}』の館長だった。ここはその二階にある、事務所兼倉庫兼父の部屋。僕たちはここで、遺品の片付けをしていた。

旅先のススキノから訃報が届いたのは、一ヶ月前。葬儀も埋葬も終えて、あとはこの映画館を閉めるだけになっていた。

僕は床に落ちていたペニスリングを拾い、見つめてみた。一体、これのどこが大切なのだか、全く理解できない。

「全部、僕にとってはゴミですから」

顔も合わせないまま、山下さんに言うと、彼（彼女）は小さく肩を落とし、アナルバイブ百五十本のもとへ戻っていった。

この映画館を閉める作業が終われば、僕は母方の叔母のもとへ引き取られることになっていた。高校を卒業して、就職するまで、という条件だけれど。もちろん叔母は、全くの堅気な人だ。

そこへ、まちがってペニスリングの一つでも持ち込んでしまったら、ただでさえ肩身の狭い上に、さらに冷たく白い目で見られてしまっただろう。

忌ま忌ましいもの。母もこういったものや、色情会館で上映される類の映画、いわゆるポルノを、心底嫌っていた。理解しようなんて、するはずもなかった。そして、僕が小さい頃に離婚した。幼い僕を置いて。

家庭崩壊の原因ともなったこれらを、だから僕も当然、忌み嫌っていた。

「有ちゃあ〜ん、あなた、転校するんでしょ？ だったらこれ、新しいクラスみなさんに、ごあいさつで配ってみたらどうお？」

山下さんは、抱えていた巨大なダンボールの中身を、僕に向かって威勢よくぶちまけた。

大量のコンドームが、ドザザザザ！ と、轟音と共に僕の頭上から振りかかり、雪崩のように襲ってきた。

「セーフ・セックス・ウィズ・コンドーム！ よー！！」

にこやかに宣言する山下さんの声は、コンドームに埋もれた僕の頭上を飛んでいった。

「しません、から……」

ゴムの山から這い出た僕は、息も絶え絶えになりながら、山下さんの提案を拒否した。

できるわけがない。

僕は、通っている高校の中では、僕が色情会館の息子だということとを、隠し通していた。

一年生の頃、クラスの大貫くんおおぬきが一度だけ、色情会館に上映作をこっそり見に来たことがあり、それがバレてクラス中が大さわぎになった。

「大貫、色情行っただって?」「つか、通ってんだってよ!」「しかも週一で」「いや毎日!」「こないだ遅刻したの、色情行っただんだろ絶対」「じゃ、あの早退も、色情行きだな」「最近なんて学校休んでまで色情行ってるしな」「休みすぎだろ、色情ハマりすぎやバすぎ」「大貫退学? 色情に住んで完璧な変態になるんだろ」

そうして、大貫くんは学校を去った。

僕は、彼をかばうこともせず、息を殺すようにして、その騒ぎをただ見ていた。

僕のことだけに及ばず、人の人生まで狂わせる、父の仕事。色情

会館。

僕はそこから、必死で逃げて隠れるように生きてきたけれど、それともう、すぐ終わりだ。

新しい生活も、それはそれで窮屈なことになりそうだけど、これまでみたいに、うまくやっていけるはずだ。

息を殺して。

存在を殺して。

自分自身を、徹底的に殺して……。

気持ちが重く沈んできた。頭を切り替えよう。

まずは目の前の、膨大なやつらを片付けて。

僕が作業に集中しようとした、そんなとき。

「おい、これは！ 見てみるよ！！」

「きゃーっ、街山ちゃん、それすごいお宝よ！ 有ちゃんも見て見て！」

二人の嬌声に、思わず振り向いた。

振り向いた僕の視線の先には、床一面に大人の玩具が散乱する中で、ピョンピョン跳ねる山下さんがいた。その横で、背の高い街山さんが、丸いケースを手に行っている。

街山さんの手にあるもの。それは、
一本のフィルムケースだった。

s c e n e 2

「街山さん、それは……？」

僕は、街山さんが手にしているフィルムケースが、少し気になった。

それは、おびただしい量のいかがわしいエログッズの中にあつて、何だか異質に地味だったので、僕の目を引いたのだ。

「どうやら、見た感じでは館長の秘蔵ものらしいな」

手にしたケースを引っくり返したり、か細い照明にかざしたりしながら、街山さんが答えた。

古びたケースの表面には、タイトルも無く、埃まみれで汚れきっている。

「秘蔵もの！ きゃーっ！！ まさにお宝ね！」

山下さんは、浮かれ調子でくるくる回り、狭い部屋中の埃と、ミニスカートの裾をまきあげている。

「それ、随分古いものみたいですけど」

「ああ。色情会館じゃ、最近はフィルムかけてなかったからな」

映画館、と看板を掲げつつも、色情会館では、経営の苦しさもあり、最後のほうはほとんど、ビデオを上映していた。父は、独自の

ルートで入手してきた膨大な裏ものを、自身の手で編集してまとめ上げ、上映にかけていたのだ。けれども、その筋では、ビデオの選球眼が抜群に良いとかで、それなりに評判ではあった。

「ね、ね、これ、どうにかして見られない？ 街山ちゃん」

回転をやめた山下さんが、頬を赤く上気させて聞いた。

街山さんは、固いケースの蓋をこじ開け、中のフィルムを慎重に取り出し、リールに巻かれた最初のほうを少し引き出して、光にかざした。

「ううむ、これはかなり傷んでる。まともに見るのは不可能だろう。仕方がないが、捨てるしかないな」

「そう……。残念だわ」

街山さんの一言に、山下さんはガツクリと深くうなだれた。先程の、くるくる回っていた人とは思えないほど、しおらしくなっている。

山下さんの消沈で、今まで賑やかだった部屋の中が、一気に暗く沈んだ。

重い空気の中、僕は、街山さんの手にしたフィルムから、なぜか目を離すことができずにいた。そして胸の内に、ある迷いが生まれていた。

.....。

父の遺した、秘蔵のフィルム。

お宝？ いや、僕にとっては、単なる汚いフィルムだ。

けれどそれは、このまま色情会館と共に、永遠に消えてしまうのか。

誰の目にも触れずに。

そしてフィルムが消えれば、父のことも完全に、僕の中から消えてしまうのだ。

……それで、いいのか？

……本当に、いいのか？

……………。

無意識だった。無意識のうち、言葉が、口をついて出た。

「でも、やってみなきゃ、わからないじゃないですか」

その声に、自分で驚いた。

街山さんと山下さんは、一瞬、虚をつかれたような顔をしたけれど、すぐに、二人顔を見合わせて、ニツコリ微笑んだ。

「そうだな、有。ものは試しだ。一度、映写機にかけてみるか」

「有ちゃん！ おったかーら、有ちゃん！ おったかーら！！」

元気に小踊りする山下さんを先頭に、僕たち三人は、一階の映写室へと向かった。

s c e n e 3

小さな映画館の、ひときわ小さな映写室。そこに、男三人がひしめいていた。

「街山ちゃん、私、何からしようかしら？」

「それじゃ山下、スクリーンの調整頼む。俺は映写機をセッティングするから」

人が三人もいれば、酸欠で息苦しくなるほどの、小さな映写室。こんなに狭い中でも、二人は手際良く動いていた。映写技師の街山さんの指示の下、山下さんは準備を進めていく。僕は、ここで仕事する二人を見るのは、初めてだった。

二人はずっと、父と共にこの色情会館を守ってきた。プライバシーでの親交も厚い。

街山さんは、父が、全寮制の女子校に夜中、忍び込み、敷地内に建つ女子寮の白い外壁をスクリーンに仕立てて、『THE・援交女子校生』美少女性奴隷ハメ撮り百二十分一本勝負』をゲリラ上映する、大変態行為をはたらいたときも、映写技師として父をサポートしていた。旧知の仲だから、共犯者として喜んで手を貸したそうだ。

街山さんは、フィルムケースからフィルムを取り出し、映写機にセットした。

「有ちゃん、あなたは席についてて」

山下さんに促されるまま、僕は、全部で三十脚の椅子が並ぶ客席に降り、ほぼ中央の硬いシートに腰掛けた。

やがて、場内の明かりがゆっくり落ち、後方の映写室から一筋の光が射して、スクリーンにカウントリーダーを浮かび上がらせる。

そして静かに、カウントダウンが始まった。5、4、3……

この瞬間は、自然と胸が高鳴る。

「さあ。始まるわ、館長の遺した映画。有ちゃん、シットバアーツク、リラアーツクス！」

カウントダウンは進む。

2、1……………

s c e n e 4

2、1……………

……………???

カウントダウンが終わり、本編とおぼしきものが始まったけれど、目の前のスクリーンに何が映っているのかは、全く判明できなかった。

劣化したフィルム特有の、ざらついた質感の画面めいっばいに、何かドス黒い、生き物めいたものが、ただうごめいている。

しかし、映像が、極限の寄りから、微妙に引きになると、僕はついにその正体が、わかってしまった。

「マァーヴェラス！」

映写室の山下さんが、歓喜の声を上げる。

「私、大好きよ、こんな、こんな……」

山下さん、言わないで、僕、聞きたくな

「こんな……巨根!!」

……………。

……そう。今、スクリーンに映し出されているのは、まぎれもな

く、いきり立った男のドス黒い波動砲なのだ。

とんでもなく巨大な。

しかも無修正の。

生々しいそれは、さらに生々しくてやけに汁っばいお相手と、ガチンコ勝負をいたしていた。

しかし、僕は……僕は、あえて言おう、僕は、まだリアルな女性経験がゼロなのだ。それどころか、異性の手を握ったことすら無いまま、ずっと純潔を貫き通している。

そんな人間が、大画面でモロに、完全無修正の黒アワビ姫VS黒い波動砲を目の当たりにしているのだ。

あまりのショックで、性的不能にでもなったら、どうするんだ!?

状況処理能力が混乱し、座席で、凍り付いたように全身が固まっ
てしまったために、スクリーンから目を外そうとも外せない僕をよ
そに、山下さんは黄色い歓声をあげた。

「そうよ！ こういうのよ！ こういうの、あたしにも挿」

その言葉を断つかのように、映像が切り変わった。

けれど、そこにはまた別の、大濡れアワビと肉欲バズーカの結合
シーンが、大映しになるのだった。

「おお、これは」

街山さんも、感嘆の声を上げる。

切り変わる映像。再び、結合場面。

切り変わる映像。再び結合。

結合。結合。結合。結合……。

局部結合場面の連鎖は、幾度も、幾度も、限りなく続いていく。

ノンストップで展開する、全力性交中の性器オムニバスムービーを、僕はただ、呆然として見ていた。

「ちょっと街山ちゃん、さっき映ったの、あのコのじゃなかった？
ほら、あの、えっと」

「ああ、阿藤鷹だな」

「そうそう！ 他にもいたわよ、懐かしいわあ」

後方の映写室から、二人の話し声が聞こえる。

「鷹ちゃん、性技の帝王って呼ばれてたけど、実はオフじゃ、マイホームパパだったのよね」

「そうだったな。でも、女優を手マンで潮吹かせた直後、手も洗わずに三歳の娘に電話するのは、どうだろうな」

「あら、鷹ちゃん、仕事中的なについ、娘さんのことが恋しくなっちゃったのよ」

二人の和やかな談話とは対照的に、スクリーン上では相変わらず、激しい濡れ場が続行されていた。

「そっいゃ、鷹は」

あられもない映像を肴に、古きを懐かしむ話を楽しんでいたはずの街山さんは、なぜか突然、言いかけた言葉を飲み込んだ。まるで、不用意に禁忌にでも触れてしまったかのように。そして、次に迷いながら、言葉を継いだ。

「鷹は……」

s c e n e 5

「鷹はもう、死んじゃったんだよな」

街山さんは、喉の奥から低く、つぶやいた。

「そうね。でもほら見て、他にも懐かしい人が、いっぱいいっぱい発奮してるわ！ チョコムース向ちゃん、飯島藍ちゃん、桃衣望ちゃん、カルーセル牧様、ボビー・フラナガンちゃん、倉尺七海ちゃん……」

性交中の局部どアップだけの映像から、映っているのが誰なのかを次々と言い当てる、山下さんの眼力と記憶力は、超人級だ。

「山下、ちょっと待て、それって全員！」

「わかってるわ」

一瞬にして、心が暗転したかのようなトーンになった山下さんは、胸に迫りくるものを押し殺すように、声をしぼり出した。

「ここに映っているのはみんな、亡くなった方ばかりよ」

その山下さんの言葉は、今、上映されているフィルムの、真実の姿が何であるのかを、僕に伝えるものだった。

僕は気付いた。

次々と現れる、この世を去った者たちの生殖器が織り成す映像。

これは、スクリーンに投影された遺影なのだ。衆目の中にめくるめく映り、そして消えていった、ポルノ界の人々の遺影。

そして長い沈黙の後、山下さんと街山さんは、とつとつと語り始めた。

スクリーンの中の、数えきれないほどの男たち、女たちのことを。

素人潮吹き百人斬りの企画ものを撮影後、精魂尽き果てたまま、明け方、家路につき、自宅前の道路で、抱き着いてこようと飛び出してきた娘をかばい、暴走トラックにひかれた阿藤鷹。

アイドルポルノ女優として人気を博した後、テレビタレントや、実体験を元にした作品で小説家としても華々しく活躍するも、度を越した過労と度重なる心労で入院、誰もがその名前すら忘れ去ったころ、長きにわたり入院したまま、病床で生涯を終えた飯島藍。

究極のM男、ボビー・フラナガンは、五寸釘で自らの性器を板に打ち付けるなどのパフォーマンスを行い続けていたが、そのパフォーマンスの集大成として、ゴルゴタの丘で十字架にはりつけになり、ロングヌスの槍で貫かれた傷口から大量出血したため、死に至った。

幾度となく性転換手術を繰り返し、男と女の間を渡り歩いたカルーセル牧は、けんらんこうか絢爛豪華なレビューが売りのクラブで舞台に立ち、世を絶する美貌で称賛を浴びるが、自らのセクシュアリティの在り処に迷い続け、苦悩から逃れるように、自宅豪邸で一人、ヘロインに溺れ、違法薬物乱用の現場を摘発されて投獄、その獄中で自死した。

桃衣望は焼死体となって産業廃棄物処理場で発見され、倉尺七海

は投身自殺、チョコムース向は……………

二人の話が続く中、最大限のスケールで生殖行為を映写するフィルムはなおも、回り続けていた。

今、男のピストン運動は、限界を超えた速度に達しようとしている。

精力の限りを尽くす激しい映像と、死を語る二人の声との間で、僕は思った。

ここはまるで、葬送の世界だ。

そしてまた、一人の男が昇天した。

暗闇の中で唯一、光るスクリーンを前に、目を見開き、耳をそばだてながら、次第に僕は、その世界にどっぷりと没入していった。

s c e n e 6

とりとめなく続くかと思われた、山下さんと街山さんの話は、唐突に終わった。

映像が、プツリと切れるように、終わったからだ。

「フィルムはこれで、全部終わりだ」

「ええ。色情会館の最終上映作品として、申し分無かった……で、ちよつと有ちゃん、有ちゃんが大変よ！」

性と死が交錯する世界の、あまりにあっけない幕引きに、突如として置き去りにされた僕は、明かりの消えたスクリーンを見つめたまま、魂が抜けたように呆然としていた。

「モロ見えの毒にやられたな。山下、有を外に連れ出して、風にさらすんだ」

「有ちゃん有ちゃん、頭冷やそ！」

おぼつかない足元でよろめく僕は、映写室から駆け付けてきた二人に肩を貸りながら、一緒に外へ出た。

夜風が心地良い。辺りは、すっかり夜になっていた。

僕たちが出てきた建物の屋上では、電飾の消えた『色情会館』の

看板が、月に照らされてぼうつと光っている。

僕は山下さんに介抱されながら、まだどこかぼんやりした意識のまま、その看板を見上げていた。

「しかしまあ、館長の秘蔵もの、さすがの出来だったわ。館長ったら、ダテに年間千本、エロスなムービー見てたわけじゃなかったのね」

「ああ。変態が一周まわると、ストレートに無修正でくるんだな」

街山さんはそう、冗談めかして言うと、山下さんと顔を合わせ、そして二人で晴れやかに笑った。

そんな、まったく呑気に思える二人が、さっきまでの暗闇で語られ、スクリーンに上映されていた出来事と、あまりに不釣り合いだったので、そのミスマッチさが可笑しくなり、緊張の緩んだ僕も、一緒になって笑った。

僕たち三人は、声を揃えて、底が抜けたように笑っていた。その笑い声は、終わってしまったものたちへのはなむけのように、夜空に高く響き、闇に吸い込まれていった。

固く締め付けていた理性のボルトが外れ、さんざん笑ってお腹がよじれそうになっている僕に向かって、山下さんがふと、尋ねてきた。

「有ちゃん、明日だっけ？ おばさまがお迎えに来るのは」

僕がうなずくと、山下さんは街山さんと、『私たちはもう、行か

なきやね』と、目線で短い会話を交わした。

それが、色欲の世界に生きる二人と、平凡な日常の世界に旅立つ僕との、一生の別れになることは、言葉でなくとも遠回しに伝わってくる。

ここに、ささやかな終わりが、訪れようとしている。そして二人のゲイは、別れの作法をしっかりと、心得ていた。

「有ちゃん、おばさまのところでは、そのムツツリスケベを直しなさいね!」

「館長の墓に線香やは、俺たちが手厚くやるから、後のことは気にするな」

そう言って、山下さんと街山さんは、お別れにと、僕に小さな包を一つ、手渡してくれた。

「それじゃな、有。あまり、おかしい趣味にはまるなよ」

「有ちゃん、私のスペシャルお別れハグハグよ!」

鼻息の荒い山下さんは、僕をきつく抱きしめた。体臭もきつかった。

手を振り、去っていく二人の姿を、夜の中にすっかりワイプアウトされていくまで見送った僕の元には、贈られた包みと、長い間、抱き続けていたわだかまりの解けた心が、残されていた。

言えないままに過ぎてしまった、さようならの響きがなごる気持

ちで、小さな包みを解いてみる。

するとそこには、リボンをかけられた、金色に輝く新品のペニスリングが現れた。

月明かりの下、ぽつねんと立つ僕の手のひらで、二人がくれた金色の輪が、いかかわしくせに、やたら堂々と光る姿に、僕はまた可笑しさがわいてきて、一人、自然と顔がほころんでいた。

そして、僕は再び、色情会館へと戻ってゆく。

終演を迎えた、この小さな映画館と、色情の世界を求める旅路で逝った、一人の人間のことを、しっかりと胸に刻むために。

s c e n e 6 (後書き)

作品中の人名は、全て架空のものであり、実在される方とは一切の
関係の無いことを、固くおことわりさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5548d/>

色情の息子

2010年10月17日10時02分発行